

くらしナビ 学ぶ

@大学

自校教育 創立者の出身地で 実践女子大が記念式典 地域との連携も

近年、建学の精神や創立の理念を再評価し、自校の歴史を振り返る「自校教育」に力を入れる大学が増えている。実践女子大などを運営する実践女子学園は今年5月に創立120周年を迎え、創立者である下田歌子の出身地、岐阜県恵那市岩村町で初めて記念式典を開いた。創立者の出身地で式典を開くのは全国的にも珍しい。その狙いなどを探った。

●建学の精神を伝授

自校教育は、大学の歴史や建学の精神、教育や研究の成果を授業などを通して学生に伝えるもの。最近では教職員の研修の一環として実施されることもある。先駆けは明治大や立教大で、1997年のことだ。明治大は学部間共通総合講座として「日本近代史と明治大学」を開講。立教大も「立教大学の歴史」をスタートさせた。その後、大学進学率がアップする中、新入生に大学に入学する意味や、大学のことを知ってもらおうと、法政大や成城大、拓殖大、明星大、敬愛大、京都産業大、近畿大など全国各地の大学に広がっていった。

●「女子教育の原点」踏まえ

実践女子大を擁する実践女子学園は、2009年から今年3月まで理事長を務めた井原徹氏(現・白梅学園理事長)が創立者の下田歌子(1854~1936年)の再評価に力を入れた。下田は明治から大正期にかけて活躍した教育者・歌人。女子教育の先覚者として知られ、生涯を女子教育の振興にささげ、実践女子学園のほか、各地の教育機関の設立に携わった。井原氏は「『女性が社会を変える、世界を変える』という建学の精神は

男女共同参画社会が叫ばれる現代に通じる。また、戦前に清国(現・中国)から女子留学生を計200人以上受け入れるなど、創立者の数々の功績は学園の原点であり、きちんと伝えなければならないと思った」と説明する。学園では下田歌子研究所(現・下田歌子記念女性総合研究所)を設置し、10年には下田の出身地である恵那市と連携協定を結ぶなどしてきた。

大学では1年次の必修科目「実践入門セミナー」で「学祖の生き方」などを学ぶほか、毎年9月に希望者を募り、「学長と行く、学祖故郷の旅」で教職員と学生が下田の生家があった恵那市岩村町を訪ねている。付属の中学校では2年次に移動教室で同市を訪れ、地元の中学生と交流をしてきた。

そうした中で、「教職員が創立者の故郷で学園の歴史や建学の精神を振り返り、新たなスタートを切りたい」と、創立120周年を迎えた5月7日、現在は顕彰碑が建つ下田の生家跡地で記念式典を開いた。当日は学園関係者や卒業生、地元住民など約150人が出席。地元中学生と高校生による学園歌の斉唱や獅子舞などが披露され、和やかな式となった。

来賓として招かれた同市の小坂喬

実践女子学園の創立者、下田歌子生誕の地で開催された創立120周年記念式典。新たな記念碑が建立され、学園関係者によって除幕式が行われた。右から2人目が山本章正理事長=岐阜県恵那市岩村町で



峰市長は「学園と多岐にわたる交流を重ねてきており、連携をより一層深めていきたい」と話した。また、下田の墓所の清掃活動などを10年以上にわたり続けてきた地元のボランティア団体、岩田うた子会の渡会直子会長は「郷土の偉人、下田歌子先生の功績に改めて触れることができ、感激した。70人いる会員も新鮮な気持ちになった」と振り返る。

●奨学金制度スタート

今春、学園の理事長に就任した山本章正氏は「創立者の下田は我が国の女子教育の先駆者であり、女性の地位向上に大きな足跡を残した。その原点ともいえる地で、関係者が思いを新たにできたことはとても意義深い。恵那市とは今後も連携を深めていきたい」と意欲を見せる。学園で

は、地元中学卒業生を対象に、実践女子大・同短期大学部入学生への奨学金制度を今年度から発足させた。

●改革の指針に

大妻女子大(東京都千代田区)も、学院創立者の大妻コタカの出身地である広島県世羅町との連携を模索する。リクルート進学総研所長で「カレッジマネジメント」編集長の小林浩氏は「少子化が進み、高等教育機関にも再編・統合の波が押し寄せ、私学としての存在価値が問われる時代になってきた。偏差値だけでなく、教育の質で進学先を選ぼうとする動きも強まる中、創立の理念を見直し、改革に生かそうという動きが活発化しており、さまざまな動きが出てくるだろう」と話す。

【中根正義、写真も】